

檀信徒にやさしく説く 真言宗の偈文

第一章 在家勤行の偈文

懺悔/三帰・三竟/十善戒/開経偈/五大願/回向文/百字偈

第二章 法要の偈文

如來唄/云何唄/散華/九条錫杖/三力の偈/四智漢語讚/心略漢語讚/仏讚/至心回向/三礼/礼文/闍伽香水/正念誦/五誓願/四弘/後唄/露地偈/地神勸請偈/法身偈/六大無碍頌/舍利礼文/出家唄

第三章 葬儀の偈文

取剃刀偈/八葉白蓮偈/大師引導の大事/受五結の偈/即身成仏義言/雪山偈/迷故三界城/如來証涅槃偈

第四章 作法の偈文

十仏名/展鉢偈/受食偈/供養偈/蟲食偈/五観の偈/正食偈/食竟偈/眠覚偈/起床の偈文/漱口偈/洗面の偈文/著裙偈/著袈裟偈/隱所偈/沐浴偈/入眠偈/鳴鐘偈/聞晨鐘偈/驚覚偈

第五章 その他の偈文

一切有為法偈/受施偈/本覚讚

云何唄 うんがばい

云何得長寿 うんがとくじょうじゆ
金剛不壊身 こんごうふえしん
復以何因縁 ふいがいんねん
得大堅固力 とくだいけんごりき

〔云何「いかん」が長寿にして、
金剛不壊身を得、
復また、何の因縁を以て、
大堅固力を得る。〕

奇妙な題だと思われるかもしれませんが、偈文
心略漢語讚 しんりやくかんごさん

一切善生主 いっせいせんせいしゅう
妙用体無礙 ひょうりやうたいむがい
三界如大王さんかいじょだいおう
遍照我頂礼 へんしやうがちやうらい

〔一切善生主なり、
妙用体無礙なり、
三界は大王の如し、
遍く我が頂礼を照す。〕

〔大日(の)讚ともいいます。この別称から
もわかりますように、大日如來を讚する偈文です。
前掲の「四智讚」が金剛界の大日の讚であったの
に対し、この偈文は胎藏界の大日の讚となってい
ます。〕

円鏡力故実覚智

〔えんきやうりきこじつかくち〕

〔六大明神にして常に瓏伽なり。
四種曼荼羅ししゅまんだ、各「おのおの」離れず。
三密加持すれば速疾に顕む。
重重帝釋じゅうじゅうたいしやうなるを即身と名
づく。
法然に敬養「さはんじやう」を具足して、
心敬心王しんじやうしんおう、利便「せつじん」に
過さたり。
各「おのおの」五智無礙智を具す。
円鏡力「えんきやうりき」の故に実覚智「じつかく
ち」なり。〕

〔遍法界頌「へんぽうかいじゆ」〕「即身成仏の
偈」ともいいます。

弘法大師の「即身成仏義」や「大日経開題」な
どに説かれているもので、とくに「即身成仏義」
は紙数のほとんどがこの偈文の解説に費やされて
います。大師がそのように懇切に述べられたのは、

出典は「大般涅槃經(だいぱんねはんぎやう)」
寿命品です。このお経は釈尊が入滅
での最後の旅の様子を記録したもので、
重視されるお経の一つです。「涅槃經」
ものには、原始仏教に属するものも、
後種のものがありますが、典拠
は曇無讖(どんむしん)が漢訳し、
四十巻本のお経です。
どうして出典が大乗經典であるよ
ういいますと、原始仏教の「涅槃
經」では内容に大きな違いが、
小乗の「涅槃經」では、釈尊は、
つづつあることを弟子たちに示し、
あることを再確認させます。そし
つた後は教え(法)を抛り所とし、
いくようにと遺言するのです。

心経が六百巻の「大般若
經」から「心経」と呼ばれ
ることに挙げました。「心略漢語
讚」の漢訳ですが、出典はとも
うりゆうじぎき、せいりゆう
の讚の一句ごとに注の形で、

では、偈文の内容をみてみましょう。
第一句目はいくつかの読み方が可
あげたものは「國訳密教」のもので
全氏は「一切の善生主、主よ」とい
れています。「真言宗常用經典講義」
も、「一切の善生主」、「一切善生の主
みも可能です。これらの読み方の主
かけている相手が単数か複数かとい
「一切の」とすると複数になります。
「よく生まれた者」という意味から仏
ますので、この句は「すべてが善
まじまじとくこりやう、まじまじとくこりやう」

この偈文に密教の根本の教えが
です。「即身成仏義」において、
述べられています。

〔積してはいく。この二頌八句を
四字を敷す。すなはちこの四空
り。一切の仏法はこの一句を出
両頌を樹(た)てて無辺の徳を具
頌の文(もん)を二に分つ。初めの一
頌の文を敷く。次の二頌は成仏の両字を
偈文の作者については、古來三説が
あります。第一は真言の八祖(大日如來
法大師まで伝えられた代々の祖師)が
たものというものです。第二は大師の
す恵果(けいか)和尚の作とするもの
第三が弘法大師の著作とするもので、
前掲の大師の著作を出典として扱っ
うです。

さて、その内容ですが、先にも述べ
に密教の肝要を述べるもので、弘
著作を費やしているほどのもので、
く説明しようとするれば数冊分のペー

如來証涅槃偈

如來証涅槃 じやうらいしやうねはん
永断於生死 げうだんおしやうじ
若有至心聴 にやぐうししんちやう
常得無上樂 じやうとくむじやうらく

〔如來涅槃を証して、
永く生死を断す。
若し、至心に聴くならば、
常に無上樂を得ん。〕

葬儀で用いられる天蓋(てんがい)の楯の上に差
しかける一種の日傘)に下げられる小幡に書かれ
る偈文の一つです。他宗では四本幡の偈文として
用いられることもあります。不学にして偈文の名
前を知らず、

此食色香味 しじきしきこうみ
上献十方仏 じやうけんじゅうほうぶつ
中奉諸賢聖 ちゆうぶしゅうけんじやう
下及六道品 げきりやうどうほん
等施無差別 とうせむじやくべつ
随感皆飽満 ずいかんかいほうまん
令諸施主得 りやうしやうせしゆとく
無量波羅蜜 むりやうはらみつ
汝等鬼神衆 にやうきんじゆ
我今施汝供 がこんせにやく
此きこむけ(こむけ、れんごまう)

大眼偈

大眼偈 にやうみんげ
若睡眠時 にやくすいみんじ
当願衆生 どうがんしゆじやう
身得安穩 しんたくあんなん
心無動乱 しんむどうらん

〔若し睡眠する時には、
當に願うべし衆生、
身は安穩を得て、
心に動乱無きこと。〕

夜眠る時に唱える偈文です。「豊山派 作法集」
によれば、臥具の上に端座して、臥眠眞言を唱え
た後に、この偈文を唱えることになっておりま

出典は実叉難陀(じつしやなんだ)訳「華嚴經」
(通称「八十華嚴」)浄行品ですが、經典は「以時
寢息、当願衆生、身得安穩、心無動乱」とな
っており、第一句目が異なっております。ただし、偈

う)「光明遍照高貴徳王菩薩品」によるものです。た
だし、經典では第四句目は「常得無量樂」とな
っています。
出典の語をする前に、偈文の語句の意味をみて
おきましょう。
第一句目の「証涅槃」とは、「涅槃を達成した」
ということ、悟りを開くこと、解脱することを
表わします。
第二句目の「生死」は、生と死を際限なく繰り返
返して輪廻することを意味します。したがって、
この句の意味は「永遠に輪廻を断じた」というこ
こになり、迷いの世界から脱したことを、解脱を表
わします。
第三句目の「心して聴いたならば」という意味
ですが、聞くのはもちろん仏さまの説法、つまり
仏教の教えのことです。
第四句目の「無上樂」もしくは「無量樂」は、悟
りによって得られる真の安樂のことです。

上には十方仏に献じ、
中には諸(もろもろ)の賢聖に奉じ、
下には六道品に及ぼす。
等しく施し差別無し。
感に随つて皆飽満せよ。
諸の施主をして、
無量の波羅蜜を得せしめよ。
汝等(なんぢら)鬼神衆、
我は今、施して汝の供とす。
此の食が十方に遍じて、
一切鬼神の供たらん。〕

「受食偈(じゆじぎげ)」に続いて、供養の目的
を述べ、「供養偈」が唱えられます。
「食事略作法」などでは右の偈文を「供養偈」
として一つの偈文のように扱っておりますが、正
確には「汝鬼神等」以下は別の偈文です。両者を
区別する場合は、「此食色香味」から「無量波羅蜜」

文の意味そのものは大きく異なりません。ちなみ
に、仏陀跋陀羅(ぶつだばつだ)訳の通称「六
十華嚴」では、該当の箇所は「昏夜寢息、当願衆
生、休息諸行、心淨無穢」となっており、だいが
ニアンスの違ひものになっていきます。
では、偈文の意味をみてまいりましょう。

第三句目の「安穩」は現代語の意味と大きく変
わりませんが、浄土の平穩な様子などを考えて
いただけるとよいかと思えます。たとえば「無量
壽經」には極樂浄土のことを、「清淨安穩にして微
妙の快樂あり」と説いております。「安穩」と書く
ことでもあります。

第四句目の「動乱」は、現代では暴動や政争な
ど世が乱れることに使われますが、仏典では心が
乱れることをいいます。
「睡眠につく時には、まさに衆生のために願うべき
です。その身に浄土にいるような安樂と平穩が
訪れ、その心は乱れることがないように」と